

河本氏

『第一治安維持、第二資本投入、第三移民。』

山崎氏

『理想は満鐵を引抜いたら零となるといふのでなくて、總てのものが伸びるのはいい、然し當分の間、満鐵が中心になつてやる必要がある。』

河本、山崎兩氏

『満鐵の中心は奉天に行くのがいい。』

河本氏

『滿洲に國家的集團資本を必要とする際には、満鐵をして働かしめるのが一番いい、他に色々なものが出来ては、経費の負擔其他に付き非常な障害が起る、これは満鐵にやらせるがいい。前述の大方針は政府及全權府と○○○○が出来てる。』

河本氏

『東支鐵道、これは支那が東支線の利益の半分を取つて居る、滿洲國が取ることになる、○

○○○○○○○○○○やうにする、○○○○○○○○○○ロシヤ○○○○○○○○○○、○○に對しては○○○○
○結ぶ、或は○○○○○○○○○○やる。』

又鐵道は縦の方を強めて、○○○○○○○○○○にする。

滿洲國に半分の利益を取るには、ロシヤが滿洲國を承認してからでもよい、ロシヤは結局自分の利益を考へ、滿洲國と手を握るに至る。

東支線は今は利益が上らぬ、利益があつても投資の形にして利益を分けぬ、ロシヤ人が支那人より頭がいいから。

ブラゴエンスクより東へ○○○○○○○○○○○○○○○○○○方針が必要だ、アムール鐵道○○○○○○○○○○○○○○、それは○○○○○○○○。

今までは第二松花江(○○○○)だ、今度は洮昂鐵道が出来た、今度は○○○○を興安嶺○○○○。これは僕の私見だ、あせつてはいかぬ、自然に○○○○。』

轉じて碧山莊を見る、福昌華工株式會社の經營にかゝる支那苦力の一大收容宿舍、冬期收容人員一萬三四千人、夏期八九千人、一日平均一萬人、其の八十パーセントは山東苦力の由、百

二十名の苦力頭に依つて統制せらる、各苦力頭は少きは三十人多きは二百五十人の配下を有し、配下に付ては全責任を負担す、頭の収益一ヶ月五十圓乃至三百圓に及ぶ、苦力の日收は年平均五十五六錢、食料二十五六錢を支拂ひ三十錢が苦力の實收となる。

宿舎、煉瓦葺一階建の棟何十となく並ぶ、堂々たる壯觀だ、内一舎に付いて其の内部を見る、一高齋東西寮（三階）の二三階の寢室と云つた装置、柏餅巻にした寢床があるのも向陵の萬年床を偲ばせる、こゝは殆ど獨身者の宿舎だ、妻帯者の宿舎は別にいくらかある由。

苦力の社會生活は實に程度が低い、一人の妻が三人四人の男を夫と極めて生活を確保してゐるがある、中には夫婦の内男が妻の物欲を満たし得ぬ場合は、自分が進んで外の男を連れて來る、そして其の男が第一の夫と共同して生活を保證する。

夜、星が浦星の家に於ける滿鐵理事村上義一氏の招宴に行く、村上氏は宮崎君の舊友、星が浦は大連郊外の別荘住宅地、風光明眉、身内地にあるの感、村上氏は語る。

『事變突發當時の狀況、事變前支那側の排日侮日は漸次露骨になつて居た、口に筆に滿鐵打倒を叫んで居た、自分は事變前一年前に鐵道局長として赴任して來て、滿鐵の情勢を見るに、

あらゆる手段を盡して、或はロシナ側と組んで自分の利益すら犠牲にして日本を苦しめることに努力した、競争線を作る、そこで自分は若し此の現状の儘で放置するならば、寧ろ日本は旗を卷いて南滿洲を捨つるに如かず、けれども南滿は日清日露の犠牲を拂ふて得たもの、而かも鐵道は其の眼目だ、之を捨てることは出來ぬ、どうして呉れる、其時の關東軍の本心は一般には分らぬ、自分は軍部と共同で滿鐵警備演習をして、其の講評を聞いて居り、石原參謀あたりと話して居た關係上、軍部はもうこゝまで來れば何時でもやる、甲の場合は斯う、乙の場合は斯う、丙の場合は斯う、丁の場合は斯う、と各案をすつかり極めて居た、そして支那側も夜間演習を始める、關東軍も夜間演習をやる、自分は結局これは騒動になるなと感じた、自分は以前軍部に對して斯う云ふた事がある、滿鐵各驛に高いタンクがある、あれをやられたら汽車はとまる、どうして呉れるか、軍部としては飛行場など夜明以前に押へる案をチャンと作つて居た、餘り準備が出來て居て早かつたから、内田總裁すら初めは分らなかつた、總裁が關東軍司令官に會つたのは、そして方策を確立したのは十河氏の功である、早かつたのはあらゆる準備が出來て居たからである、決して日本から仕掛けたのではない、我

慢に我慢を重ねて、もう之れ以上堪へることが出来なくなつて、謂はゞ相撲が互にし切つて
 チリチリと睨み合つて、充分機熟した機にヤツと立ち上る、立ち上るや否や電光石火の早さ
 を以て相手を投げ倒したのである、こう来ればあゝ、あゝ来ればこうとあらゆる場合に對處
 するの方略を練つてあつたから、あゝ云ふ遣り口となつたのである。』

十月十七日

午前九時旅順に向け出發す、遊覽道路上より大連市街を望む、美し、星が浦霞半島に登り後
 藤新平伯銅像の前に立つ、英姿懐し、附近の風色内地より優れたり、海岸づたひ白砂青松あれ
 ども、磯の香なきが物足らず、赤、青、色とりどりの別荘住宅散見す、此邊に別荘でも持ちた
 いなア、櫻、アカシヤ、等の植樹多し。

大連より旅順まで十一里、道路の半は坦々たるアスファルト舗装、アカシヤの街路樹兩側に
 續く、風強く天氣清朗、左手に日露戦争當時の驅逐隊根據地小平島を望む、沿道の山々松の殖

林多し、馬に跨る若き娘、荷馬車を引く少女、老幼婦女を長閑に満載せる馬車等を追ひ越す、
 滿洲の一風景。

旅順に近く白銀山のトンネルを出づれば、黄金山、白玉山の表忠塔、鮮やかに浮く、二十餘
 年前屍山血河の地、今や化して平和の別天地となる、アカシヤ樹林多し。

日露戦後記念陳列館を見る、元露國將校集會所なり、天井、壁に大小の彈痕、當年の激戦を
 偲ばしむ、各室に行けば更に大彈痕（天井、兩靈山激戦、奉天大會戦の模型等感深し、松樹山
 の樹木砲彈突き込みたるまゝのものあり。

關東長官々邸に行く、警務局長林壽夫、内務局長日下辰太、高等法院長土屋信民、事務官水
 谷秀雄、同松崎憲司、同伴東、同森本勝巳、久保田海軍大佐、等に出迎へらる、午餐を共にす。

日下氏

『旅順は樹の多い處です、この官邸は元の極東長官の官邸らし、關東廳設立當時、建物に引
 かされて、こゝに中心を置いたけれど、今となつては大連がいゝ、若くはずつと北がいゝと
 思ふ。』

久保田大佐

『古い時代を調べて見た、ロシア時代には十隻も浚渫船があつて氷のない時は常に堀つて居た、今では軍艦が長いから、五千トンの巡洋艦がせいぜいは入れる丈だ。』

一の疑問は黄金山の半腹に塔がある、あそこに水道があるのは分つて居たが、更に調べて見たらあの山の下に浄化器があり、それを地下のタンクに入れて置いたのが最近分つた、今は古いものを壊すときは必ず寫眞をとることにして居る。

將來港として使つて行くには水の研究が必要だと思ふ、こゝは石灰石で水が非常に悪い。

尙ほこゝは露國極東政策の先端であつたが、日本から云へば大陸政策の入口に過ぎぬ、立場が違ふ故その重要性も自ら違はざるを得ぬ。

旅順は今第○遣外艦隊の中心となつて居る、最近は營口、安東附近の匪賊の爆撃をやつて居つた、飛行機は皆佐世保に飛んで歸つた、當時は驅逐艦四隻と巡洋艦一隻が中心であつた。今は一トンの水が蒸溜装置に依つて五圓で出来る、大連で積めば一トン三十錢位なるべし、然し大連に取り行けば燃料を要す、海軍は艦隊の行動に○○○○○○○○○○○○○○○○○○、艦隊

の必需品の供給は大連で積込んで居る。

滿洲に匪賊が盛だと云ふ、けれどもあの民家に銃眼のあるを見よ、昔からあつたのだ。

滿洲國の成立が民意によらずと云ふのか、然らば民國の成立のときの状態は如何、十六人かの督軍が賛成したのみだ、夫れ以外は何も知らなかつたではないか。

調査團は治安委員会が出来たが、誰が選挙したかと云ふ、然し自ら其地方の有力者が代表を選べば、それこそ最もいゝ代表ではないか、民國でも最近こそ投票権のやうなものを作つたが、長く各ギルドの意見で極められて來て居る、滿洲のみに歐洲式民意を要求するのは實情に適應ぬ。

匪賊が出たと云ふ新聞紙が出れば、匪賊は其の新聞を學良に見せて飯の種にする、日本の文明が彼等を食はせて呉れる。

此の間内地の下士官の妻から私の家内の處へ『私の夫は北滿に行きました、然し北滿は危険だから南滿へ呼んで貰ひ度い』と云ふ依頼狀が來た、私は妻に命じて返事を書かせた『南滿はもう内地と同じ、仕事などはない、北滿ならまだ見込もあらふ。』と。

内地から見に来るのは一番いゝ時許りに来る、嚴冬の時、雪解けの時、眞夏の繁茂期、この三つを比べて見ると滿洲のいゝか悪いかが分る、こないゝ氣候許りを感じ、こないゝ月許りを見て、滿洲がいゝなど云ふのは認識不足だ、仕事をする人は最悪を見よ、金があつて別荘を建てやうと云ふ人は大連や旅順に來い。

支那や滿洲で寫眞を撮つて見よ、支那で撮れるものが日本では撮れぬ、どう云ふ譯か、大氣の乾燥せる爲めだ、天高く馬肥ゆは日本ではない。

尙ほ當地で日露戦跡を訪はるゝならば、海軍關係の分として、是非海軍閉塞隊の記念碑に参拜して貰ひたい、閉塞隊勇士の死體が旅順港内に流れついたときに、流石の露軍も、日本軍の勇烈に感激措く能はず、勇士の靈に敬意を表し之を慰める爲に現在記念碑のある處に丁寧に埋葬したとの事です、後之を白玉山に改葬しましたが、元の墓所に記念碑があります、之を是非訪ふて貰ひ度ゝ。』

森本勝巳氏(警務課長)

『事變に依る警察官の殉死者二十五名、家族(妻)一名、負傷百名、派出所の狙撃八十件、放

火二件、以上が附屬地防禦の犠牲です、世間では何時も軍隊と比較されるが、これは全然違ふ、鐵道守備隊は大體同じだが、これは北方に進出し、その後を引受けたのが警察隊です、例年は四五名の犠牲者がある、現在警察官の數五千名、内二割五分が州内他は州外に勤務して居ります、五千人の内巡捕(支那人の巡查補助)一千七百人居ります。

警察は元來行政警察をやつて居る、たゞこの場合だから止むなく警備について居る、この間のコレラ大流行のときは四百名を割いた、こう云ふ譯で警備力が少ないのです。

時局以來二千三百名を増員した、内巡捕千名、巡查千二百五十名、監督五十名、軍隊側に云はすれば、軍隊が引上げて來れば警官はいゝまい、又警察は軍隊よりも警備力が悪いと云ふ、これを信する人もある。

然しこれは間違ひだ、現状の治安状態はまだ續くものだ、附屬地を守るには從來の警備力では足らぬ、増員の理由がまだ消ぬ、且つ將來滿洲側の行政を指導せねばならぬ、活動範圍が自然廣くなる、今後寧ろ増員の必要が起らう。

又警備力としては軍隊がいゝと云ふが、之は皮相の觀察だ、軍人は一人者だ、警官は女房

子もある、兵に及ばぬと云ふが全然間違ひだ、民を防がんとする場合警備につくときは、軍の戦闘の場合と同じ精神でやる、守備隊の犠牲と警察隊の犠牲とでは警察の犠牲の方が多、守備隊としては死者二十名もない、この誤まつた誤解を正さねばならぬ。

費用の関係、警察官は一人千圓以上かゝる、守備隊はこれほどかゝらぬと云ふが、曩にも述べたやうに警察官には警備許りではなく、行政警察方面がある、多いとしても大した問題ではない、又軍隊には移動交代する場合があるので其の時は相當に費用もかゝる。』

久保田大佐

『將來の旅順に付て、近時日本の勢力が伸びて来るに従つて、此の方面に漁業問題と云ふのが段々多くなつて來てる、これは將來益々増えやう、これ等の點から見てもこゝを中心とする必要がある。』

出で、閉塞隊忠魂碑を拜す、『忠烈輝萬世』の碑文を仰ぎ感無量。

博物館を見る、優れたる佛像、立派なミイラ、其他大陸文明の粹を集む。

白玉山に納骨堂並に表忠塔を拜す、手を翳して回顧すれば、旅順の大小戦跡殆ど指呼の間に

あり、老虎尾半島、黄金山、東雞冠山、望臺、松樹山より遠く西北、二〇三高地、高崎山、殊に高崎山は吾が故郷高崎聯隊の武勳を永遠に物語るもの、皇軍勇戦奮闘の狀を想見して、殆ど感に堪へざらんとす、日照り風寒し。

更に東離冠山の戦跡を見る、第十一師團血戦の跡、當年の塹壕尙ほ歴々、砲壘は露軍がベトンで固めた永久設備、皇軍の威力に爆破せられて形状無残、此の砲壘奪取のため皇軍死者五千に達すと、勇魂山野に満ちて喊聲尙ほ聞ゆるが如し。

歸途に向ひ、水師營に名高き乃木ステツセル兩將の會見場所を訪ふ、兩將會見記念寫眞に寫りたる棗の木尙ほあり、家は普通の民家、向つて左手日本軍委員室、右手露軍委員室、中央の室會見室、室内に古びたるテーブル様の臺あり、會見當時机として用ゐられた由、野戦病院の手術臺なり、庭前に水師營會見所の碑あり、碑前にて記念寫眞を撮る。

裏街道を大連に向ふ、沿線の部落整頓して住民其の堵に安んず、滿洲とは云ふもの、こゝは日本の租借地、治安よく維持せられて不安更になし。

道に水なき小流を渡る、渡ると云ふも橋あるにあらず、川底に石を疊みて車馬通過す、雨水

稀に至れば水は石壘上を流るゝの仕組みなり、而かも流水中の雜物を防ぐ爲めに上手に石柵を置く、その状恰も橋を倒さしたやう、ハシと呼ばずにシハと呼ぶか。

牧城子に古墳を見る、夕陽漸く西に傾き赤い光が赤い岩山を照す、大氣は澄んで山肌を鮮やかに見せる、古墳は千五六百年前漢時代のもの、一二ヶ月前道路工事の爲め撥掘したるなり、地下に立派な煉瓦造り第一、第二、第三の室あり、第二室には其の中に更に一室あり、此の中に棺を納めたり、今は棺及附屬品全部京都大學に於て鑑定中の由、壁畫鮮やかに見ゆ、繪の種類は、虎、蛇、鳥、武士、女、龍、文官等、靈前に伏して之を祭るの状、歴々指點すべし。

周水子を通る、夕日沈み暮色漸く迫る、農夫馬車を驅つて家路に急ぐ、平和の氣天地に滿つ。午後六時より大連市長小川準之助氏の招待にて座談會に望む、出席者市長、陸軍少將岩井勘六、取引所長小林和介の三氏。

小川市長

「大連ではよくこう云ふ心配をする、吉會線が完成すれば大連の繁榮を奪はれはせぬかと、然し吾々はそうは思はぬ、大連から出るものは豆、油、其他だ、之が行先は歐洲方面だ、だ

から必ずこゝを通る、木材丈は向ふへ行くだらう、大連の地位は北滿が開拓されれば愈々其の重要さを増して來ると思ふ。」

岩井氏

「吉會線が出来ても皆取られることはない、それ處か他にもまだ一港を作つていゝ。」

小川市長

「港としては羅津は大したものだ、朝鮮東海岸から浦鹽までに、あれほどの良港はない、總督府は最近まで雄基、清津等に迷つて居た、これは問題ではない、山梨さんは清津だと云ふた、築港した、然しこれは無意味で問題にならぬ。」

岩井氏

「清津は羅南に師團を置いた關係上あゝなつた、將來としては雄基清津羅津を比較すれば問題はなく羅津だ。」

治安に就ては、この日本の二倍以上の廣大な土地の治安は、日本軍の手で中々やり切れぬ、南滿は自由に兵力の轉用が出来たが、北滿はそれが出来ぬ、仕方がないから滿洲國軍を置い

て、これを適當に監視監督する外あるまい。

部落々々には自警團（自衛團）が必要だ、匪賊討伐の際は之を遊撃隊とする、これは要所要所に置く、そして通信機關を作る、これが今はない、かうすればもう少し敏活になる、遊撃隊は滿洲國軍隊だ、日本軍隊の駐劄は勿論必要だ。

小林氏

『支那人の中で、日本兵が出て来て居る内は治安維持は出来ぬ、と云ふのは生業が出来ない、生業が得られるならば馬賊にならぬ、日本軍が引いて呉れば治安はよくなる、と云ふものがある。』

小川氏

『大分兵匪や馬賊に荒さるゝ故、今年は大分耕作地が減つたと云ふ意見があつた、處が實際はそうでなかつた。』

岩井氏

『私は支那民族程強い生活力の強い民族はないと思ふ、山東で追はれば滿洲へ来る、

動物と同じだ、長春まで徒歩で行く、辛抱強きこと世界一だ、愈々となれば土地土地で先へ先へと送つて呉れる、山東から關東までは汽船で来るが、後はノコノコ何處までもやつて行く、そして土地を見付けて耕作する。』

小林氏

『元は山東苦力が来て働いて又歸つたものだ、今は山東の兵亂其他の關係上、移住してしまつた、これは民國の計畫移民ではない。』

岩井氏

『彼等は長春以北へ行かねばならぬ、空いてる處へ行つて根據地を作る、途中金がなくなつてどうすることも出来ぬ、子供を持つてる者は之を賣つて行く、荷物は薄ッぺらの布團一枚、敷布團はいらぬ、西式を地で行つてる、一寸疊めばいゝ、行き着いてアンペラ一つ買つて家根を作れば、それで家が出来る、退けやうとすれば金を貰はねば動かぬ、強い奴が残つて弱い奴は初めから死んでる、病氣など大したものはない、皮膚病が多いが、胃病などはない、イカサマ賣藥を賣るが、これが結構きく、この連中との競争では日本は敵はぬ。』

私は日本人を勝たせたいと思つて三年計畫でやつて見た、初め鐵道工事に入れやうと思つて、鹿兒島の者四百二十名が來ることになつた、滿鐵も了解して海倫克山間の鐵道工事に使ふことゝなつた、處がハルビンの水害に打突かつて、彼等は一ヶ月間ハルビンに滞在した、これがいけなかつた、殊に半分以上は勤め人無産黨員其他が居た、日給は一圓五十錢だ、處が支那人を使つて居る日本人は三圓五十錢も取る、それで怠業をした、農業移民は三年五年では成功せぬ、七年十年経つて漸くよくなると云はれる、ほんとうの成功は十五年だと云はれる。』

小川氏

『從來日本移民は大部分失敗して居る、どこが違ふか、支那人は高粱などの安いものを食つて居る、日本人は非常にまづいものを食つても十五圓かゝる。』

旅順の師範學堂に日本人と支那人の同年の者が入る、初めは支那人が胸もせまいやせて居る、食料は日本人十五圓、支那人五圓、二三年たつと支那人がすつと肥る、どうしてか、三分の一の食費の方が榮養がいゝ、日本人はどこへ行つても榮養の少ない日本食を食ふ、これ

がいかぬ。

生活方法をこの土地に合ふ様にせねば、假りにいゝ素質の者が來ても随分問題だ、衛生だ、學校だ、そんなことがやつて行けるか。

拓務省の移民果して成功するや否や、もう少し根底のある調査を何故やつた上でやらぬか、どう云ふ収益があつて、どんな金がかゝるか、それが出来るか、遠藤君は蒙古通は蒙古通だが、計算は出来るか。』

岩井氏

『鹿兒島の移民は志願者が多かつた、條件が徹底しなかつた、或る場合には厄介者を寄こした、測量機や何か借りたものを賣り拂つた、話にならぬ、四百二十名の内百八十何名は残つた、結局、本當の決心がないのだ、歸す外なし。』

小川氏

『私は政府が今度やるのに、どれ丈調査したかを疑ふ、滿鐵其の他に移民可能論がある、山条サンの時分五百萬圓出して關東州内に地面を買つた、此處で生活に馴らして北方に行かせ

る、可能論だ、私は不可能だと云つた、結果はどうだつた、五百萬圓金を出して大變の地面を買つた、今大連農事會社が出来てる、治安はいゝ、氣候はいゝ、園藝をやる、豚を飼ふ、鶏を飼ふ、それが果してうまく行つたか、これすらうまく行かぬではないか、沃野千里だ、三十年間は肥料はいらぬと云ふ、けれども關東州や附屬地などでやるのと、奥地の馬賊の出る處でやるのとは違ふ、私は素人考へから結果から見ても議論する、然らば不可能か、不可能とは云はぬ、研究が必要だ、研究即ち實行の出来るやうなものが必要だ、自分が調査した研究でなければならぬ、斯う云ふ杞憂を持つて居る。』

岩井氏

『こゝは幼稚な大農法だ、女は使はぬ、動物を使つてる、滿洲事變後は移民の止め役をせねばならぬ、過去の移民は八分通り失敗だ、私はまだ二分通り残つてると思ふ、これを研究すればゆきそうなのだ。』

小林氏

『こゝに二つ取引所がある、私共のは大連取引所で關東廳がやつて居る、もう一つは大連商

品株式取引會社がある。

吾々の官で取引する場所（市場）の經營をして居る、規則や何かを作つてやらせる、實際商賣をしたものを帳簿に乗せる、これ丈だ、取引品目は大豆、豆粕、豆油、高粱、雜穀である、輸入品、綿絲、綿布、株式等は民營でやつてる。

吾々の處では商賣が出来た上は信託會社にやらせる、實際の現金の授受は保證せねばならぬ、そこで其の保證はこれをやる信託會社をしてやらせる、斯う云ふ制度はこゝ丈だ、世界各國では取引所は會員組織だ、日本は會社だ、こゝは場立ち等は支那人だ、支那人は官でやらねば信用せぬ、そこで此の制度が滿洲に於ては一番いゝ、信託會社が保證其他の決算事務をやる、處が日本人は金を持つて來て銀を買ふ、この爲めには錢鈔取引所が出来た、かくて重要物產取引所を作つた、好況時代に綿絲綿布等も儲かつた、これにも取引所が必要、處が官はこれが出来ぬ、そこで今後出来る取引所は民營にしようと思ふことになつた、大正八年以來今官でやつてるものでも、將來民營が出て來れば民營にしよう、そこで利權屋が出来る、支那人が反對する、支那人は民營のものは皆信用しない、然し法律の原則は民營だ。

今は圓滑に行つて居る、期間は五ヶ月先をやつて居る、現在取引人(免許)は特産市場が八十餘人、内二十人が日本人、錢鈔は六十五人内二十六人が日本人だ、今までの支那に於ける日支合辦事業は資本丈を一緒にせんとした、この取引所は本當の共存共榮だと思ふ。』

午後八時一高以來の同窓、伊藤和雄、吉植庄司、岩崎弘重及金井温治の諸君來訪、誘はれて日本料亭に行き互に杯を舉げて健康を祝す、歡至るに及び相共に一高寮歌を合唱す、滿洲の旅の最後の夜を感激の寮歌を以て結ぶ、二十年の青春ここに燃えて感激高鳴る、あゝ懐しの向陵よ、若き滿洲國よ。

十月十八日

午前十時大連埠頭より香港丸に乗る、八田滿鐵副總裁、大連市長、吉植、金井其他の諸氏に見送られ、五彩のテープ鮮やかなる中を靜々と岸壁を離る、市街と山々と意味深く吾等を送る。

過ぐる二週間、親しめる滿洲の山よ、野よ、水よ、さらば！

島山結に、海水やゝ黄に、晴れ渡る秋空に天日照照。

大氣澄みて山影鮮やかに空に映す、大連市煙と波の間に漸く没せんとす。

武藤全權に宛て左の謝電を發す。

『生等一行視察中各官憲の御配慮に預り感謝に堪へず、離滿に際し御禮申上げ、全權閣下の御健康を祈る。』

船大連灣を出づ、天日に映ゆる黄海眼前に開く、日清役黄海々戦を思ふこと頻り。

デツキゴルフに興ず。

前關東軍參謀長、現運輸部長三宅中將、末次大阪税關長など同船。

午後四時半、西方遙かに且つ明らかに山東半島を望む、夕陽漸く西水平線に近し。

午後五時入浴後船室に籠りて、滿洲視察の原稿整理にとりかゝる、日既に没し勃海蒼茫として暮る。

六時夕食を終る、東天波の間より赤錆びたる二十日月寂しく出づ。

八時、無線時事海上版及今日のニュース配達する、御知らせに曰く、

『今夜八時ヨリ明朝四時ニカケテ滿洲時間ヲ日本時間ニ改メル爲メ一時間進マセマスカラ左様御承知置キヲ願ヒマス。』

十月十九日

昨夜はよく熟睡したので六時過ぎ起床、顔を洗ひ服装を整へて甲板に出づれば、風殆どなく

旭日東天に上り淡月西空にかゝる、一望緑の海、遠く東の方に島山、右舷にも島影を認む。

朝食後デツキゴルフ、税關の荷物検査。

十二時晝食、食後三宅中將は語る

『事變前支那兵の日本に對する侮辱は實に多かつた、日本兵が奉天市街を通行すると通りかかつた張學良の近衛軍隊の兵が銃口を擬する、怒つて手出しをすれば新聞紙は日本軍の暴行だと書き立てる。』

以前は附屬地外二三里の處には馬賊など居なかつた、最近は附屬地の側まで來て居た。

日本人の子供が支那人に虐められる、親父は憤慨して憲兵隊に怒鳴り込む、何の爲めに軍隊が派遣されて居るのだと、尤もだ、然し吾等は 陛下の軍隊だ、待つて呉れ、明日から兵隊を付けてやらう、軍隊は 陛下の御命令がなければ動けぬのだから、と云つて慰めて置いた。

だから今度の事變も何時起るか分らぬと云ふ状態であつた、そこにあの事件だ、兵は喜んだ、この糞野郎と思つて居た處へあの戦闘だから兵等は勇躍して飛び出した、一寸晝寢をするともう行つて來ませう、と云ふ、極力輕擧を戒しめ、鶏を割くに牛刀を用ゐるの用意をさせて居る。

支那人は非常に慘忍だ、人間だかどうだか分らぬ、歸順軍が匪賊を捕へて自己の二心なきを示す爲めに、その匪賊を處罰するから見てくれと云ふて來た、此方の將校が行つて見ると、奉天の東陵で其の匪賊を處刑した、何で殺すかと云ふと、内地に薬の押切り器がある、あの押切り器でチョコキンと切る、殺す方も殺される方も極めて平氣だ、支那人は諦めの國民だ、

没法子（仕方がない）だ、事の決まるまでは泣いたり拜んだりするが、愈々駄目だとなれば平氣になる、そして押切り器でどんどん首を切る、之を又土地の奴が集つて来て見て居る、これも平氣だ、妙齡の婦女など日本では死骸を見ても青くなるが、彼等は懐からパンを取り出して首の切口から流れる血を付けて食べて居る、迷信の結果だとは思ふが、人情のないには呆れ返る。

支那軍の組織は實に振つて居る、何時か自分が旅團長るとき、知合ひの支那の旅團長が来てお前も旅團長になつて今度は金が澤山入るだらう、いくら給料を貰つてるかと聞くから三百何十圓だと云ふたら、驚いて俺の方は旅團長になれば金が出るのだが、それではおまへの方は金は出来ぬなといふ、支那は先づ假りに旅團の金が三十萬元かゝるとすればその三十萬元は旅團長に渡される、旅團長は其中から先づ三萬なり五萬なりを取つてこれを部下に渡す、部下將校は又自分の分をいゝ加減取つて下に廻す、終ひにはもう渡る金がなくなる、そうなるとう度は其の部下の者は兵器や彈藥を賣つて自分の取前を取る、それには敵味方互に敵對戰鬪の隊形を取つて居つて、彈藥兵器を相手に密に賣る約束をする、そして兵は申譯け

に上の方へポツリポツリ鐵砲を打つて居る、時耐になると賣つた代金丈の火藥を置いて退却すると云ふ調子だ。

張學良は今北平に十二萬の兵を持つて居る、熱河の湯玉憐は阿片の利益を自分が納めたい、學良はその利益を自分の方へ寄せと云ふ、湯玉憐の心は滿洲國に傾いた方が得だとは思ふが、十二萬の兵に叩かれては敵はぬといふ苦境、滿洲國と張學良に對し六分四分と云ふ態度です。』

夜、喫烟室に集まつて五人でビール、林檎で懐しき最後の夜を語る。

船は今對島、壹岐の間を直東に進む、月寂しく左舷東に上り、銀波僅かに躍りて物思はしむる夜、二十幾年の昔、バルチック艦隊はこの邊りを最後の運命に服すべく、黙々として東進したのかなア、漁火稀に遠く明滅す。

十月二十日

午前六時起床、身仕度を済し、甲板に出づれば眼の前に浮く六連島、樹々茂り、青い畑、黄
い畑、段々に連りて、鮮やかなること眼も醒むる許り、眼前遠く九州の山々悠然と霞む、時し
も東天翠濃き島山の上に、潤ひ深き眞紅の太陽、寶玉の如く浮き出づ、嗚呼麗はしくも尊き朝
景色哉、船止りて左轉するまゝに、右手本州の山々、繪の如く展開す、静けさ、麗はしさ云は
ん方なし、日昇るに従ひ、波黄金色に輝く。

八時頃關門に停船、予は急に豫定を變更して獨り船にて神戸に行くこととする、中村孝次郎
君ランチで見える、一度門司税關に行き、インク其他を準備して十時船に引き返し甲板休憩所
で原稿整理。

午後一時出帆内海に入る、甲板に出で、兩側に擴がる繪の如き島山、織るが如き眞帆片帆を
眺めつゝ筆を運ぶ。

五時風呂を浴びて甲板に出る、夕靄遠く、波静か、近き山は黒く、遠き山は薄墨に千變萬化
の平和境。

夕暮より雨漸く至る、如何にも日本らし、夜は原稿整理に努む。

十月二十一日

六時起床、既に神戸港外にあり、雨霧立ちこむ、七時半神戸に上陸す、二十日振りに内地の
土を踏むと思ふと何となく清々し、三ノ宮驛、汽車に乗らんとすれば、六甲の山々雨に煙りて、
一幅の名畫の如し、矢張り日本だなア。

—(終り)—

昭和七年十二月二十五日發行
 昭和七年十二月二十日改訂版

滿洲縱橫記
 定價金七拾錢

著作權
 所有

著者 篠原義政
 發行所 東京市神田區錦町三ノ二四 設樂清胤
 印刷者 東京市神田區錦町三ノ一九 恒夫
 印刷所 東京市神田區錦町三ノ一九 牧製本印刷所

發行所 東京市麹町區內山下町 國政研究會
 賣捌所 東京堂・栗田書店・大東館
 北隆館・東海堂

終

